

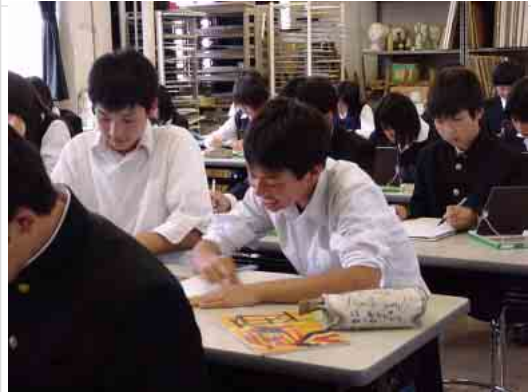
LIFE - 人間と人間の文化について学ぶ

キーワード：文化理解 探究と考察 作品鑑賞
表現活動 ものの見方とらえ方

視覚の世界を探究しよう

< 配当時間数 12時間 >

「視覚でとらえる世界」すなわち視覚芸術・視覚表現の世界をとおして文化事象を見つめ、その背景を探究したり、その手法を追体験することによって、人間とその文化についての理解を深める。



1. 単元の目標

物事や自然の事象についてとらえ表現しようとするとき、私たちは多様な手段を持っている。例えば、数値化して分析する、文章や言葉で伝える、絵や図に描いて表現する、音で表現する、などである。

本単元では、視覚芸術・視覚表現の視点から文化事象を見つめ、その背景を探究することによって、人間とその文化についての理解を深める。

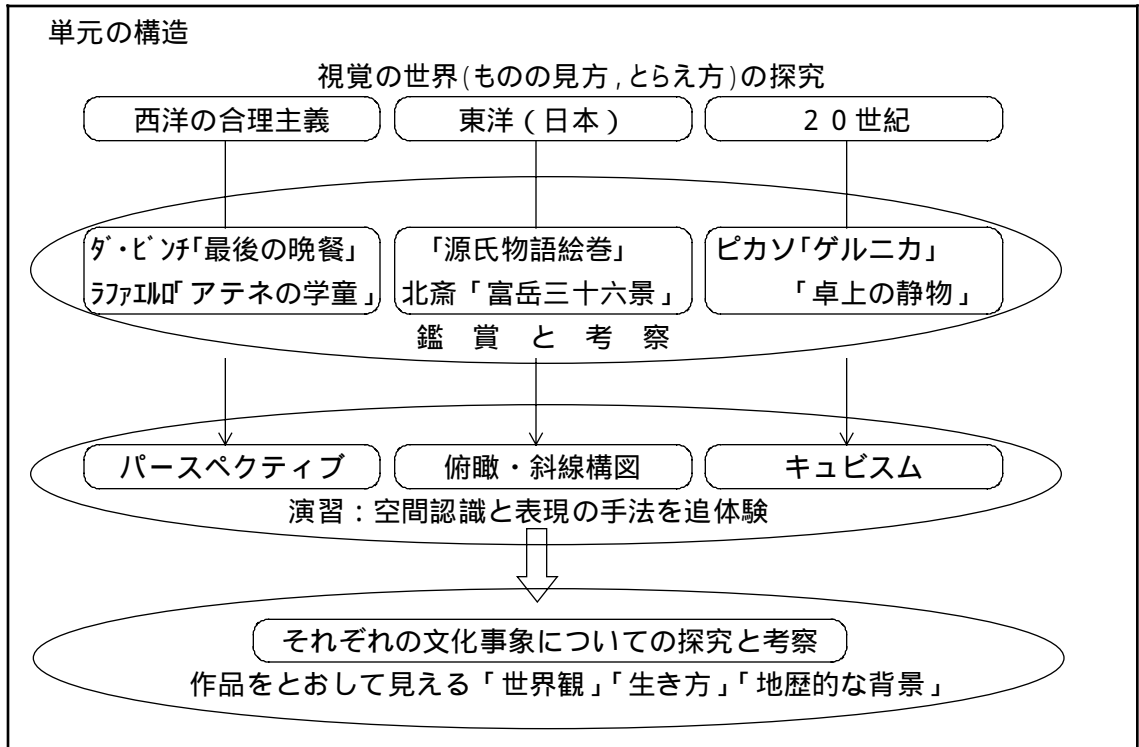
ものを視ること、描くことは物事を認識する一つの方法である。ものを視ることは何かを発見することであり、描く行為は対象を知り、それを心に深く刻み込み、自らの感性を通して何らかの表現として昇華することである。人間は様々な文化を生み出してきたが、視覚芸術では、時代や地域、民族によってもの見方やとらえかたは実に多様であり、文化事象を理解するためにはその背景にあるものを探究し学ぶことが大切である。

2. 単元の構成と特色

題材として中世から近代・現代に至る「視覚の変遷」の中で、変革期・転換点にあたる特徴的な文化事象（作品）を幾つか取り上げ、西洋と東洋、中世と近現代などの比較を交えながら探究活動や表現活動を展開する。これらの活動によって文化の背景にある世界観・人間観の違いに注目し、人間の有り様や生き方について考える学習プログラムである。

鑑賞や探究・考察の対象となる文化事象は、西洋の科学的合理主義の始まりであるルネッサンス期の作品、日本の中世・近世の東洋の世界観に基づいた作品、20世紀のキュビズムの作品群などで、表現の特徴について考えさせる。また、これらの作品について、書籍やインターネット等を活用して関連する情報を収集し、空間の認識方法や表現手法を考察することによって、その文化の背景を探究する。さらに、それぞれの手法を用いて実際に表現（描画）をおこなう。表現手法を追体験することでその時代の人々のもの見方やとらえ方、世界観についての理解を深める。

第4章 LIFEの事例



3. 主題に迫るための手だて

- (1) 導入時に作品鑑賞に重点を置き,スライドやVTR,画集等の資料を提示しながら,素直な感動や驚き,発見,疑問などを学習の動機付けとして大切にする。
- (2) 主体的に学習する態度と自己教育力を高めるために,探究活動や体験(実技演習)の時間を有効に配置する。

4. 単元における評価の観点・方法

- (1) 文化について,その事象を生み出した社会の価値観を探りながら理解しようとする態度(文化理解についての視点・方法)・・・行動分析,レポート評価
- (2) 多面的な視点からの情報収集や探究の能力・・・記録分析
- (3) 主題を生成・構想し,創造的に表現する能力・・・作品評価
- (4) 課題に取り組む意欲・関心・態度・・・行動分析,評価シートによる自己評価

5. 教科等との関係

学校教育では,人間が生み出した様々な文化について体系化された学問として学んでいるが,生徒たちの内側ではそれは断片化された知識の集合に留まり,生きて働く知恵にはなっていない。この単元での学習は,各教科で学んだ自然科学や芸術,人文科学などの知識を横断的に活用することによって主体的な学びを創造し,知を総合化するものである。

第4章 LIFEの事例

(3) 探究活動

文化事象(作品)を理解するためには、単に作品を眺め感動しただけでは不十分である。その文化の背後にある「人間」や「人間の生き方」を探究することによって理解を深めることができる。探究活動は以下のように進めた。

導入時のスライド等による作品鑑賞と同時に[資料]のワークシートを提示して鑑賞における考察の視点を明確にし、これからの探究活動の糸口を見つけさせる。

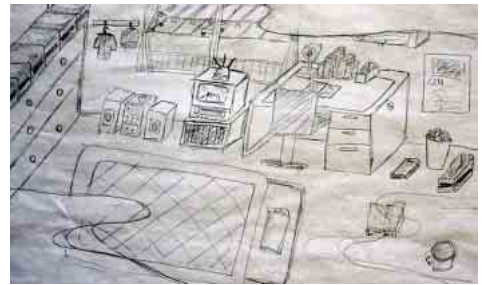
鑑賞や体験活動をとおして関心を持ったたり疑問に感じたことを整理させて、探究の対象となる文化事象(作品や作家)を複数選ぶ。

書籍やインターネットなどで関連する資料を収集する。

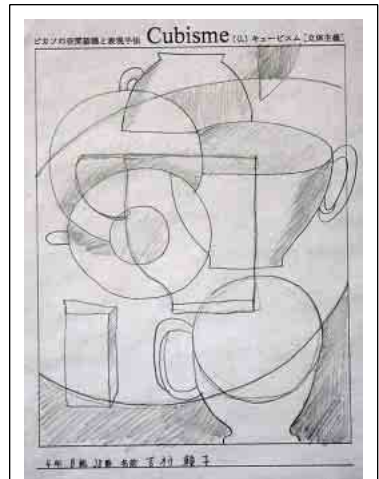
探究したことを幾つかの項目[資料]に整理し、考察を試みる。(レポートにまとめる)

(4) 文化の比較考察

上記の探究活動で取り上げた複数の文化事象について、比較考察を試みる。例えば「東洋と西洋」、「中世・近世と現代」、「パースペクティブとキュビズム」などの比較の視点で、空間認識、空間表現の手法、形態や明暗表現の特徴について考察し、「時代の様式」、「地域・民族の様式」についての理解を深める。また、現代の、そして自分のものの見方やとらえ方についても考えさせる。



資料 生徒の演習例「東洋の俯瞰図手法」



資料 生徒の演習例「キュビズムの手法」

資料 生徒のレポート事例(部分)

「視覚の法則化」

(1)「レオナルドとピカソのまなざし」《パースペクティブとキュビズム》

15、16世紀のヨーロッパでは、東方文化との交流、経済活動の発展、都市の繁栄などを背景とした市民階級が、中世の封建的な社会秩序や教会の精神的束縛から解放され、人間中心の思考方法や感情を取り戻した。この時代は自然や人間を科学的・合理的に見つめる自然科学の発展が顕著になり、視覚芸術においても科学的な空間表現の方法である透視図法(パースペクティブ)や解剖学に基づいた人体の比例と均衡などの研究が熱心に取り組みされた。一方、19、20世紀のヨーロッパでは、市民革命以後の自由・平等といった市民の意識変革などを背景に、芸術にもおおきな変化が起きた。芸術はもはや宮廷や宗教に奉仕するものではなく作者の思考や個性によって多様に表現されるようになった。特に、視覚芸術では19世紀の写真の発明などがあり、ものを再現描写することの意味合いが変化した。さらに、20世紀のピカソはキュビズムを主張し、ルネッサンス以来の空間認識の方法を決定的に覆したのである。

(2)「東洋と西洋のまなざし」《源氏物語絵巻》と「最後の晩餐」

12世紀に描かれた「源氏物語絵巻」などに見られるように、日本の中世における絵画の空間構成の特徴は斜線構図と斜め上から俯瞰する情景描写である。物語に不要なものは除外され、形態は遠近法に関係なく自由に並列的に組み合わせられている。

一方、「最後の晩餐」はあらゆる点で、そうした中世の空間構成とは著しく対照的である。人間の目を一点に固定して見える外界、すなわちパースペクティブの消失点に奥行きが集中するという科学性合理性を重んじた空間構成(視覚の法則化)の手法である。